

鶴見良行

『バナナと日本人 ——フィリピン農園と食卓のあいだ』

岩波書店（岩波新書），1982

グローバル化が進行した 1990 年代以降，従来の地域研究のようなローカルな視点を持つ研究と，地球的課題（グローバルイシュー）の影響を扱うようなグローバルな視点を持つ研究のいずれもが影響を受け，ローカルとグローバルの双方の視点を取り入れた研究が進むようになってきた。本書は 90 年代以降のグローバル化の時代に書かれた作品ではないが，ローカルとグローバルを繋ぐ研究の嚆矢として，著者鶴見の視点や研究手法は今なお古くないばかりか，むしろますます必要とされているように思える。

教育者としての鶴見

鶴見が龍谷大学の教員になり学生を本格的に指導する立場になるのは 60 歳を越えてからである。それまでは，市民と勉強会や共同研究を実施し，市民運動に参加しながら，自ら歩いて考え，「歴史ルポルタージュ」

と呼ばれた手法で多彩な活動を行ってきた。

一般のそうしたイメージとは異なり、鶴見はアカデミックな作法や教育も大変重視していたと思われる。実際に大学で鶴見から教えを受けた赤嶺綾子は、鶴見と学生たちのさまざまな場面を生き生きと切り取っている(赤嶺綾子 2006)。曰く、若いころカメラマンを目指したことがあるという鶴見の話と、それを聞いて、変わった生き方があるものだ話す学生。現場に散りばめられている学問テーマの存在を学生たちに気づかせたくて仕方なかった鶴見。たくさんの個人的な質問をして学生各人の研究テーマを探すヒントを与えようとしていた鶴見。経済学部ゼミにもかかわらず現場に徹する学問の本ばかり紹介する鶴見と、現場で起きていることが世界経済の一端を示していることに気がついた学生たち。修士論文のテーマをようやく見つけることのできた学生の発表を聞いて、躍り上がるように喜んだ鶴見。アカデミズムと一定の距離を置きながらも学術論文という形式を意識して指導していた鶴見。そうした鶴見の姿勢に呼応するように、ゼミの枠を越えて学生同士が論文を書く作法を教えあったり、夜中まで互いの研究テーマについて議論したりする環境ができていたこと。これらは、鶴見が教育をいかに大切だと考えていたかを示すものであろう。

バナナを通じて日本と東南アジアの関係を問う

本書は、バナナを題材に、フィリピン・ミンダナオ島の栽培の現場から日本での消費にいたるまでの過程を追いかけて、国際的な経済構造の中で日本と東南アジアがいかに繋がっているのかを明らかにした作品である。

第1章では、本書の主題と目的が語られる。フィリピンだけでなく東南アジアのどこに行ってもバナナはよく見かける果物のひとつである。しかし、フィリピンで生産され日本に入ってくるキャベンディッシュ種は、アメリカ資本により導入され、新しく日本向けに栽培されるようになった換金作物である。現地の人々は、自分たちが食べない作物を栽培しているの

である。しかも、現地のバナナ農園を支配する4社のうち3社はアメリカ資本であり、最大の恩恵を受けているのはアメリカ企業の株主たちである。バナナという日本人にとってなじみ深いモノを見ることによって、日本と東南アジア、広くいえばアジア・アフリカ諸国との関係が、私たち1人ひとりに直接結びついた問題としてリアルに見えないだろうか、というのが鶴見の問題提起である。

第2章と第3章では、フィリピンやミンダナオ島の歴史を踏まえ、戦前期にミンダナオ島に発達した外国資本による植民地農業の歴史的経緯が述べられる。それは、植民地政府が現地住民の土地を収奪したというような単純な図式ではない。それに加えて、戦前の日本人による麻農園の経営と対比しながら、フィリピンの土地制度や小作制度と関連した労働や技術の問題が検討される。

第4章と第5章では、多国籍企業の巧緻な土地取得や取引の形態、企業にとって有利な——栽培者にとっては市場原理が働かないような契約方法、国際的取引等、経済的な側面が、数値データを示しながら説明される。

第6章では、土地もお金も自由も、そして文化さえも奪われたバナナ栽培農家の悲惨さが、抑制された文章で説明される。その様子が感情的に記述されるのではなく、大きな歴史的経緯や社会経済構造の中で整合的に説明されるため、バナナ栽培農家の逃れることのできない悲惨さが読者にずっしりと伝わる。

第7章では、バナナ産業がフィリピン経済にとってどのような意味を持つかが議論される。この中で鶴見は、文明の進歩を、識字率の高さや死亡率の低さなどで測ることをやめ、「自分たちの生きたいように生きる、自分たちの選びたいように暮らし方を選ぶ」という目標の実現程度を基準にしようという。1980年代初頭にすでにこのような見方を提案していた鶴見の先見の明に驚かされる。

この章ではまた、バナナ栽培に危険な農薬が大量に散布されていること

が指摘される。この部分は、バナナ不買運動に繋がるなど、大きな反響を呼んだ。鶴見の意図は、バナナ栽培農民が多国籍企業のもとで苦しみがら作っている果物を、私たち日本で暮らす人間がどのように味わったらよいのかという問いを考えることにある。そもそも「食べて安全かどうか」というだけの捉え方には、作ってくれた人々の労働が見えなくなった消費者のエゴイズムが感じられると鶴見は指摘する。

ちなみに鶴見は、バナナを買って食べる。現場を歩いてものを書く調査マンは、そのモノにつきあうのが職務上の義理だからであり、また、自分は上に立って人に指令を与えるような形の（社会）運動はあまり好きではないからだという。自分の提供した情報によって読者が判断すべきであり、それはある種の民主主義の問題だとする（鶴見 1995）。こうした鶴見の明確な態度そのものも、読者それぞれの立場で考えるための材料になるであろう。

第8章では、フィリピンでの港渡しの価格が、日本での小売価格までどのように上がってくるかを述べている。

第9章はまとめであり、最後に、日本の読者に厳しい問いかけがなされる。

……つましく生きようとする日本の市民が、食物を作っている人びとの苦しみに対して多少とも思いをはせるのが、消費者としてのまっとうなあり方ではあるまいか。

私たちは豊かでかれらは貧しく、だから豊かな私たちがかれらに思いを及ぼすべきだというのではない。作るものと使うものが、たがいに相手への理解を視野に入れて、自分の立場を構築しないと、貧しさと豊かさのちがいは、— 言いかえれば、かれらの孤立と私たちの自己満足の距離は、この断絶を利用している経済の仕組みを温存させるだけに終わるだろう。

本書が出版されてすでに 40 年以上経過するが、この問いは今なお有効である。

『バナナと日本人』と鶴見の著作

鶴見によれば、本書は各論であり、ほぼ同時期に書かれた『アジアはなぜ貧しいのか』が総論だという（鶴見 1982）。総論というのが決して抽象的な議論が展開されているのではない。アジアの農民が貧しい理由を植民地時代にさかのぼって、より長期の視点から、かつ、フィリピンに加えてマレーシアとインドネシアの事例とも比較して、東南アジア島嶼部全体の視点から、アジアの農民の貧しい理由を考察している。

また、鶴見は 50 歳を過ぎてから猛烈な勢いで本を書いた。その全貌については、『鶴見良行著作集（1～12）』を参照されたい（鶴見ほか 1998）。1980 年代以降の研究作品に限れば、鶴見の研究作品にはふたつの流れがある（村井 1998）。フィリピン輸出加工区（バタアン）の研究から始まり、バナナ、エビ、ヤシと繋がる、モノに関する調査研究である。これらの主題は、日本と東南アジアの関係である。もうひとつの流れは、『マラッカ物語』、『マングローブの沼地で』、『海道の社会史』、『ナマコの眼』、『ココス島奇譚』である。赤嶺淳によれば、これは海から陸を見つめなおしてみようという作品群である（赤嶺淳 2006）。分類というほどではないが、鶴見自身が意識していたことは、本書は、日本人にとって身近で“感情移入”が可能なモノを取り上げた事例研究であり、『マングローブの沼地で』は、なじみは少ない“地理書”のような体裁、そして『ナマコの眼』はその折衷であるという（鶴見 1995）。

本書の拡がり

鶴見は 60 歳を過ぎて本格的に大学教育に携わったと書いたが、それま

でにさまざまな形で勉強会を共にし、ともに歩き、影響を受けた人たちは多数いて、多くの成果が出されている。紙幅の関係上、成果をここで紹介することはできないが、モノに関していえば、バナナ、エビ、ココヤシ、ナマコ、カツオ等に展開し、それは現在もなお、拡大中である。

また、鶴見の研究活動は、デジタルアーカイブで確認することができる。とくに、写真やノートは、鶴見の研究足跡を知り思索を追ううえで大変貴重なモノである。あわせて参考にしてほしい。

参考・関連文献

- 赤嶺綾子. 2006. 「鶴見先生のこと 教え子からみたその人となり」『ビオストーリー』6. 昭和堂.
- 赤嶺淳. 2006. 「同時代史をみつめる眼 鶴見良行の辺境学とナマコ学」『ビオストーリー』6. 昭和堂.
- 村井吉敬. 1998. 「鶴見良行バナナ研究とその周辺」『鶴見良行著作集 6 バナナ』鶴見良行（著）、村井吉敬（編）。みすず書房.
- 鶴見良行. 1982. 『アジアはなぜ貧しいのか』朝日新聞出版.
- . 1995. 『東南アジアを知る一私の方法』（岩波新書）岩波書店.
- 鶴見良行文庫デジタルアーカイブ（立教大学共生社会研究センター内）<http://tsurumi.rcccs.rikkyo.ac.jp/index.html>
- 鶴見良行（著）、鶴見俊輔（編）。1999. 『鶴見良行著作集 1 出発』みすず書房.
- （著）、吉川勇一（編）。2002. 『鶴見良行著作集 2 べ平連』みすず書房.
- （著）、——（編）。2002. 『鶴見良行著作集 3 アジアとの出会い』みすず書房.
- （著）、中村尚司（編）。1999. 『鶴見良行著作集 4 収奪の構図』みすず書房.
- （著）、鶴見俊輔（編）。2000. 『鶴見良行著作集 5 マラッカ』みすず書房.
- （著）、村井吉敬（編）。1998. 『鶴見良行著作集 6 バナナ』みすず書房.
- （著）、花崎皋平（編）。1999. 『鶴見良行著作集 7 マングローブ』みすず書房.
- （著）、村井吉敬（編）。2000. 『鶴見良行著作集 8 海の道』みすず書房.
- （著）、中村尚司（編）。1999. 『鶴見良行著作集 9 ナマコ』みすず書房.
- （著）、花崎皋平（編）。2001. 『鶴見良行著作集 10 歩く学問』みすず書房.
- （著）、森本孝（編）。2001. 『鶴見良行著作集 11 フィールドノートⅠ』みすず書房.
- （著）、——（編）。2004. 『鶴見良行著作集 12 フィールドノートⅡ』みすず書房.

❖本書の著者紹介（鶴見良行）

1926年アメリカ・ロスアンゼルス生まれ。1952年東京大学法学部卒業。1955年財団法人国際文化会館に就職。1965年「ベトナムに平和を！市民連合」（ベ平連）立ち上げメンバーとして参加。同年、アメリカ・ハーバード大学のセミナーに参加するため、南ベトナムを経由して渡米。サイゴン（現ホーチミン）で、南ベトナム解放民族戦線（通称ベトコン）兵士の公開処刑を眼前にし衝撃を受ける。1989年龍谷大学経済学部教授に就任。1994年逝去。

❖執筆者紹介（柳澤雅之）

京都大学東南アジア地域研究研究所准教授。専門は東南アジア生態史、ベトナム地域研究、農業生態学。感銘を受けた本は、今西錦司。1972、『生物の世界』講談社。